

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第145号（2018年6月）

風に吹かれて（122）

白井啓治

・ほろ苦くともふる里の風はふる里の風

ふるさと風の会12周年展が無事終わる。次の記念展は15年と言うことになるのだろうか。それまで全員が元気に書き続けられることを願うばかりである。二人を除く全員が70歳を超えていることから、これから三年後というのは、かなりハードルが高いといえる。だが、記念祭を迎えることとは別にして、ふる里についての主張の声は、益々大きく、時には怒りを込めて述べて行かねばならない、と志を新たに思っている。

12周年記念祭は、石岡市・まちかど情報センタ―で行ったのであったが、開催の三日間毎日出かけ、表の通りに立って眺めていたが、かつての中心市街と呼ばれるこの通りには、もう希望を見るものはないと実感した。全くの死に体である。ここを新たに活性化していくためには、一度完全に破壊してしまうことが必要だろう。そうしないと新芽が出てこない。新芽に育つ土がなく、不毛の砂地になってしまっている。ここに如雨露で水を撒いても雑草も芽を出さないだろう。

こんな風な言い方をすると、大いに反感を持たれるだろうが、事実である。大層に淋しいことで

あるが事実は曲げられない。

ふる里を定義するとき、小生は「ふる里とは、物語の降る里、恋の降る里」と言っているのであるが、まちかどに立って眺めた時、通りには苦いだけの風が吹き抜けていて、希望の風が吹き抜けていない。土日だというのに若いカップルも見えない。恋の死んだ町である。当然のことながら物語も降る筈もない。

歴史の里とは称しながら、話を聞くと、歴史とは程遠い自分勝手な歴史認識の里でしかない。これはもうこのふる里を再生・ルネサンスするにはすべてを破壊しつくさねば叶わぬことだろう。ここに市民の血税を当てても、砂漠に水撒きほどの効果も期待できないと言える。

こういうとかなり過激な意見ということになるだろうが、自分が投資家であったと仮定して、はたしてここに投資するだろうか。不毛の砂漠に水撒きをする人はいないだろう。

沈みゆく街を再生するには「よそ者、若者、ばか者」が必要とはよく言われる言葉であるが、この三者の影もなく自らを助けるための自助努力の發揮されない街であっては、矢張り完全崩壊を待たしかないのだろう。

口を開けば悪態を大声で言葉にしている罰が当

たったのか、十日ほど前から带状疱疹に罹り、不愉快感に悩ませられている。带状疱疹の辛さは、情報として知ってはいたが、実際に罹ってみると実に肉体的に精神的に大きなストレスを持って来てくれるものである。

小生の場合は、痛みはないのであるが、脇腹の神経に添って皮膚のピリピリ感に加え痒みと筋肉の引き攣れ感が我慢ならない不愉快を持って来る。症状は、人によって異なるようであるが、大変な痛みを伴う人も居るようである。

小生、痛みにはかなり強い方であるが、痒みとピリピリ感の混ざり合った不愉快指数はマックスと言える。

初めて罹ったので、最初は庭草との戦いで虫にでも刺されたかと思っていたのであったが、その広がり方を見て、带状疱疹かとやっと気づいたのであるが、医者にかかるのが少し遅れてしまった。

この带状疱疹、年齢が増すにつれて発症率が高くなるようである。体力が落ちて、ストレスの多い者によく罹るのだという。インスリンを打ち、カロリー制限をした食事の小生には、带状疱疹にとっては絶好の餌食だったようである。

带状疱疹は、子供の頃に罹った水疱瘡のウイルスが潜伏していて、体調が弱った時に顔を出してくるようである。子供の頃に水疱瘡をやった事のある人は、高齢化に伴って体力低下や、ストレスを溜めたりすると罹りやすくなるようである。完治までに一ヶ月近くかかるようであるので、高齢者には要注意の病である。

この不愉快感が一ヶ月も続くのかと思うと、それだけでストレスが倍增する。歳をとってからの肉体的不愉快は貰いたくないものである。

地球人的発想からすれば、こんな美しい地球(ほし)を奪う為に、なぜ宇宙人が攻めてこないのか？SF小説や映画には、激烈な戦闘場面が多く展開しているが、現実には、何者も地球を攻めに来てはいない。何の魅力もないのか？

それとも我々は自己陶醉で、地球は魅力満点と勝手にうぬぼれているだけの話なのか？

この狭い天の川銀河系内だけでも、生命が宿りうる天体は、100万個は存在すると推定されている。ならば地球より早く生命が誕生し、文明を1千万年や、1億年先行している知的生命が存在してもおかしくはない。それを前提に、宇宙人が攻めてこない理由を考察してみた。

① この天の川銀河系内に、船団を組んで宇宙を移動できるほどに、科学が進歩した知的生命が存在したにしても、同時に「倫理」面も平行して発達し、己の欲望を満たすために、他を侵略など絶対行わない。

② 生き物が生存できる基本は「生存競争」。どんな知的生命と言えども、この原理から逃れる事はできないはず。宇宙を移動できる科学を手に入れる事ができても、終始、自己優先の競争が先行し、惑星内の協調ができず、自ら滅亡してしまった。

③ 他の銀河系からの襲来は、銀河間に強大な引力の暗黒物質が存在し、いかなる物質も銀河間を超えて、脱出はできない。

先に結論を申し上げれば、以上3者のいずれかであろう。私の推理は、生き物の進化の理想的終末は①である。しかし、地球人の「生きざま」が、宇宙でも汎用し、残念ながら②が原因かと思われる。

る。③は全く未知の世界。推測できず。

*

今から138億年前、ビッグバンにより宇宙は誕生し、銀河が1700億個(観測可能)誕生した。各銀河の大きさは、矮小銀河(恒星数100万個)から巨大銀河(恒星数100兆個)まで、さまざま。

天の川銀河の大きさは中規模。具体的には、直径10万光年、厚さ1,5万光年、凸レンズ型の「渦巻き銀河」である。宇宙の中心から、毎秒600kmの速さで遠ざかっている。天の川銀河の質量のほぼ95%は、暗黒物質や暗黒エネルギーで満たされ、現在の科学で理解できる「物質」は、わずかに5%以内である。そして、最寄りの銀河は、アンドロメダ銀河で、230万光年離れているが、毎秒122kmのスピードで我が天の川銀河に近づいてきており、今から40億年後には両者は衝突・合体するという。

宇宙膨張のエネルギー源は、暗黒エネルギーと言ひ、宇宙全体に広がって、「負の圧力」を持ち、「反発する重力」と言われ、宇宙力学の標準モデルとなっている。即ち現在の膨張宇宙の原動力は、我々の知る物理学では理解できない暗黒のエネルギーで支配されている。そして、膨張が極限に達した後は、推測だが指数関数的に縮小を続け、最後はビッグバンの反対の「ビッグクラッシュ」に陥るものと考えられている。

宇宙の質量は、現在の物理学で理解できる「物質」として4,9%。現在の物理学が通用しない「暗黒物質」が26,9%。同じく物理学が通用しない「負の圧力」源である「暗黒エネルギー」が68,3%と言われる。要するに95%は、何が何だか解らないもので満たされている。さてわが天の川銀河系の最古の天体は132億年

前のものであり、わが銀河の恒星数は、昔は2000億個と言われたが今は4000億個と言われる。全質量は太陽の1,26兆倍。

太陽系は銀河系の回転軸の周りを秒速217kmで、5億年かけて、一周する。そしてわが太陽系は、46億年前、先代の恒星が老化爆死して宇宙に散った星間物質が、再凝集して「原始太陽」として誕生した。そして、あと50億年したら、太陽は燃料(水素)を使い果たし、老化爆死して、宇宙に塵芥として散り果てる。生物と同じように、物質世界にも、「輪廻転生」が存在するように見受けられる。

さて太陽と同時に、太陽系の惑星も46億年前誕生した。地球は太陽系8個の惑星(他に準惑星5個、小天体21万個)のうちの一つであり、外周4個はガス型惑星であり、内側4個は岩石型惑星である。地球は太陽から1,5億km離れた第3の岩石型惑星である。

そして地球誕生1億年後、火星ほどの大きさの小天体が地球に衝突してきて、地球・小天体とも大破壊。地球の大量の物質を持ち去り、新たに地球を回る「衛星・月」が誕生した。月の表面の一部の岩石が、地球の岩石と同一の物であることからその事が分かる。

*

さて次は生命の誕生であるが、月が誕生して数億年後、今から約40億年前、地球が、やつと冷えてきたら、海底で、原始生命が誕生した。

しかし、このようにして地球に生命が誕生したが、この銀河内で、地球だけが特異な存在である理由もない。我が天の川銀河系内で、恒星からの距離など、地球と同じ条件が、他の恒星の惑星(系外惑星)に起きない筈はなく、生命が誕生し、星間移動までできる知的生物が繁栄していてもおかし

くはない……と考えられる。

恒星との距離、岩石や大気元素構成、惑星誕生からの年数、水が3態（固体の水、液体の水、気体の水蒸気）をなし、恒星やその惑星誕生後の時間など、地球にそっくりの惑星は、天の川銀河内だけでも100万個は存在すると考えられている。全宇宙についていえば単純計算でその1700億倍の星に知的生命が宿っているかもしれない。ならば、地球的発想をもってすれば、いつ他の天体から宇宙人が攻めてきてもおかしくはないという事になる。

*

現在の地球上は生命であふれているが、恐らく生命の元祖はただ1個の単細胞から始まった。全生命はその子孫である。その根拠は全ての生命はDNA・RNAなど、核酸により遺伝の設計図が描かれている。いかなる生物も、設計図通り発育・成長・生殖を行う。多細胞生物の体細胞は、生殖細胞の保護・育成・生殖が完了すれば御用済みで、個体死が待っている。それゆえ、全生命の共通性から、元祖はただ1個の単細胞と考えられる。単細胞生物は、出芽・分裂などで増殖し、事故以外、老化などによる「死」はない。

地球上の生命は、30億年間、単細胞時代であった。今から10億年前、ある単細胞は、隣の単細胞に食われないためには、2個体が結合して体を大きくし、後、多数の単細胞が寄り集まり、体を大きくした方が生存確率を高めるという事で、多細胞化した。人類はおよそ60兆個の細胞からなる。そして、多細胞生物に進化した後は、遺伝子に多様性があつた方が、生存確率が向上するため、「雌・雄」が生まれた。

生殖の際、雌雄両者が染色体を半分ずつ持ち寄り、シャッフルして合体し、新たな個体が誕生す

る。それゆえ、同じ両親から生まれていながら、きょうだいでも、シャッフルの兼ね合いで、まるで異なる形になることがある。一卵性双生児なら全く同じであるが、普通のきょうだいは、由来する両親の遺伝子活性の強弱で、どちらかにより強く似たり、中間だったりする。

例えば雑種の場合、母方と父方の皮膚の色が違えば、どちらかの遺伝子発現が抑制され、どちらかの遺伝子が強化発現されたり、両者の中間色が発現されたりする。遺伝子発現が生存に有利に働けば、雑種強勢となる。雌雄とも似た様な遺伝子同士の交配（近親交配）なら、多様性は失われ、生存能力は低下する。

例えばミミズは雌雄同体であるが、同一個体の中で、卵子と精子が受精することはめつたにない。やはり異個体間で受精が行われる。

*

さて、脱線が続いたが、現在の地球人の常識から考えれば、結構な新天地があれば、ゴミゴミした現状から脱出し、清々と新世界に移住し、羽を伸ばして暮らしたいと思うのは普通であろう。日常的に避暑地・避寒地で何の心配もなく暮らせるならば、それも真に結構な話ではある。しかしゴミゴミの原因は、人口コントロールという自律性に、欠けるから生じる。

これまでに、異星人がこの地球に来たという証拠は全くない。恰もそれらしい検証を上げて、過去に来訪した形跡がある……などという著書は多数あるが、いずれも好奇心を煽るフィクションである。UFO等、まことしやかに写真など添えて観察報告がなされるが、専門家の鑑定によれば、いずれも勘違いか、高度の画像処理技術を用いた「まがい物」。ましてや地球を攻めてきて、あわよくば

占領しようなどとすれば、かなりの船団を組む必要があろう。それだけの質量を、母星や恒星の脱出速度を超えて宇宙に飛び立つのは、ただ事ではない。しかも、すぐ隣の恒星系に移動するだけでも、何光年もかかるので、光速に近い速度をいかにして確保するか。光速とは1秒間に真空中を光が約30万km進む速さである。太陽から地球まで光が届くの約8分かかる。光速は音速の約91万倍である。

*

他の惑星から攻めて来る事よりも、逆に、こちらから攻めて行く事に置き換えて考えると……

戦艦で行くか銀河鉄道で行くか知らないが、とにかく、べら棒な重量の編隊を組み立て、太陽系脱出速度の秒速17kmで、仮に太陽に最も近い恒星ケンタウルス座プロキシマ・ケンタウリの惑星（水があるらしい）までの距離4、2光年を、どうやって飛ぶか？地球上で最も早い乗り物は、英仏共同開発のコンコルドがマッハ2であった。しかし、マッハ2では4、2光年の距離を飛ぶには、191万年かかるが、その速度では、地球脱出さえできない。太陽系を脱出するためには、最低でもマッハ50なければならぬ。マッハ1は音速（1秒間に約331m）の速さなので、マッハ50なら秒速約17kmである。仮に編隊がマッハ50（光速の約18万分の1）で飛んだにしても、片道4.2光年は7万6400年かかる。これだけの時間を人間が凍結睡眠で行くにしても、安全に「解凍」は、できるのか？

7万6400年後、現地に到着し、幸いそれほどの抵抗もなく、移住に成功したにしろ、遺伝子の重複を避けるため、男女最低500人は必要。この人数で新世界を展開するには、地球での失敗を繰り返さないためにも、徹底的に温厚で、平和主

義第一の紳士淑女を選考・凍結して、送り出さなければならぬ。新天地でも、またまた戦争を繰り返すようなら、移住の意味がない。いや、500人を運ぶのではなく、数人の宇宙飛行士が、500人の凍結受精卵250個を運び、解氷・人工子宮で培養・新生児誕生。育児発育後、新天地元祖人類として定着できるか？新生児は、野菜の促成栽培じゃないから一人前になるまでには、やはり25年ぐらいかかるだろう。こんな面倒な事考えるだけでも気が遠くなる。ましてや現地に着いたら、地球より1千万年ぐらい文明が先行している知的生物がおり、鼻であしらわれ、おなら一発で吹き飛ばされるのが関の山。

こう考えたら、他の惑星へ移住など考えられませんか？どんなに科学が進もうが、クリアしなければならぬハードルが高すぎる。ならば、地球のゴミゴミをクリアし、リホームして住みよい環境を取り直した方がはるかに手っ取り早い。アホな夢は見ない方が益し……という事になる。それゆえ宇宙人は攻めて来ない……と考える。

*

さて考えてみると、船団は互いの連絡に電波は使えないはず。なぜならば、もし目的地に高度の文明が存在しているとすれば、電波の発信元は早々に敵軍にキャッチされ、到着前に簡単に撃墜されるかもしれない。無線通信はダメという事。SF劇画を空想するのも容易じゃない。

そこで、仮にケンタウリの惑星に無事着いたとしても、抵抗があれば戦うほかない。どんな武器を持参するか？諸々考えたら、戦団は最小でも戦艦大和10艘は必要かもしれない。こちらの軍団は、7万6400年も宇宙を旅する超能力を持っていると自負しても、もし相手様は地球人などよ

り1千万年も文明が進んでいる超知的集団であつたなら、戦艦大和10艘等、お茶の子さいさい。来るなら来てみる……と鼻であしらわれるのが、落ちであろう。自惚れたバカほどアホらしいものはない。

そんなわけで、500人が片道7万6400年暮らす生活物資、燃料、通信器具。考えるだけで頭がパンクしそうだ。結局、他の惑星に移住など、超ナンセンスの夢想到過ぎない。という事は、こんなアホらしいことを実行する知的生命など宇宙のどこにもいないという事。もしいたとしても、倫理が完成し、先述③の生物を超えた「神々」の世界なのかもしれない。

私自身も、現在の人類が、こんなにも戦争好きで、平和になれないのは、数百万年ぐらい前に宇宙人がこの星にきて、いつか占領するために、人類とやら厄介な生物の遺伝子を改変し、戦争が好きでやめられず自滅させ、綺麗な更地になったら移住しようとしたに違いない……等と書いたことがある。これは単なる「戯れ」。

しかし、よく考えてみれば、片道7万6千年の移住に成功したにしても、毎日が何の苦労もない、ノホホンだけで暮らすのも飽きが来る。生活にメリハリがないなど、何の魅力もない。

*

人間が移住を望む根拠は、人口過剰により、イザコザが多すぎるからであろう。人口コントロールがうまく機能せず、むやみやたら子孫を増やしたからこそ、ゴミゴミしていると感じるのであつて、もっと人智が及べば人口コントロールは、とつきの昔にできていたはず。ならば今更、危険を冒して他の惑星に移住など考える必要もなからう。異星の知的生命も、同様と思われる。更に何か生

存に不利な伝染病とか、有毒ガスとかあれば、移住するほどの魅力はない。

地球人より1千万年も文明が進歩した異星人ならば、もし地球に移住を考えても、そのら事情は簡単に調査済みなのであろう。人類とかいう、かなり高度化された武器を持つ先住民と闘つても、移住する魅力には欠ける。

宇宙人が地球に來た証拠がないとする理由は、現在、宇宙人が発していると思われる「人工的な電波」が、全く傍受できないという事もその一つ。どんな文明が進もうとも、基地と飛行隊との連絡に電波を使わない方法はなからう。しかし現在どんな方法で検出を試みても、宇宙から人工的電波は検出できないという。これも宇宙人がこの地球に來ていないとする証拠である。

宇宙人がこの地球に攻めてこない理由として、結論は、移動期間中の生活物資や武具、燃料等、莫大な重量を光速に近いスピードでも、何万年も要するので、アホな行動は起こさない。なお無事目的地に着いたとしても、強力な抵抗にあつたら、その防御も容易ではない。自分達よりはるかに遅れている地球文明など、何の興味もない。危険を冒して探検する価値もない。利口な宇宙人ならばそう考えるに違いない。

地球人が、他星征服の夢を見るのも同じ事。ならば、逃げ出そうとした原因のゴミゴミした現在の環境をリセットして住みよい環境に組み替えた方が手っ取り早い。好奇心だけでトライするにはあまりにもリスクが大きすぎる。他星への移住は夢として残しておき、現状改善に力を注ぐ方が、はるかに利口と言える。

地域に眠る埋もれた歴史（39） 木村進

四つの佐志能神社

石岡市の龍神山の中腹と麓に佐志能（さしの）神社という古い神社があります。

石岡の方はよくご存知のようですが、二つの佐志能神社として歴史的にも話題となることがよくあります。しかしこの佐志能神社はこの近郊に全部で四か所んに存在します。



石岡市の龍神山の麓の2箇所。そして旧八郷の柿岡の近くに1箇所。それと笠間の昔の城跡の山の上（佐白山）に1箇所あります。

それぞれ皆、山の中腹や上にあるので山の神を祀っている神社をこのように呼ぶのだと思っていました。これは少し違うようです。

（一）佐志能（さしの）って何？

私も石岡に住んで十年以上になりましたが、この神社の名前についてあまり深く考えることもありませんでした。しかしよくわからないですね。他の地方にも山の上や麓に同じ名前の神社がたくさんあるのではないかなどと思っていたのですがこのあたりにしかありません。また読み方も笠間の神社は「さしのう」で、石岡の神社は「さしの」と表示されています。

平安時代の西暦905～927年にかけて編纂された延喜式という法令集に記載されている神社名として常陸国新治郡に「佐志能神社」があり、この神社がこれら4つの神社に分かれたものと考えられています。

名前の由来はわかりませんが、笠間の佐志能神社は佐白山（さしろさん）という山の上に鎮座しており、この佐白という名前と語源は一緒だとも言われています。こちらでは、昔「佐白三所大明神」、「三白権現」（阿武・黒袴・小聖の三社）とも称されたように、三つの白い神様がいると伝わっています。そして、佐白山は「三白山」とも表記され、昔存在した佐白山の正福寺に伝わっていたという伝承では、「白馬、白鹿、白雉」（笠間市の説明では「白い雉、白い鹿、白い狐」という山の神の使いがいてこの動物が山を守っているといわれており、ここから「三白」という名前になったなどと伝わります。そして、こちらはいろいろな伝承話が存在しますが、もっともこれは名前から連想して造られたお話とも言えそうです。

豊城入彦命（とよきいりひこのみこと…崇神天皇皇子）の後裔に佐代公（さしろきみ）がおり、豊城入彦命の東国進出の後を継いで東国に根を張ったという解釈があり、この「佐代公」は勇ましいという意味の「曾志」に「公」という姓を与えて「曾志乃公」といつていたのが訛って「佐志能」となったというような解釈が「新編常陸国誌」ではされているようです。柿岡にある「佐志能神社」は隣に丸山古墳があり、この古墳には豊城入彦命の奥津城（墓）という伝承が残されています。

（二）染谷と村上佐志能神社

これらの神社を順に見ていきましょう。まず、染谷佐志能神社は龍神山の中腹に鎮座しています。風土記の丘公園からも近く、通りに面した参道入口から桜並木を進むと、山への登り口に鳥居が立っています。江戸時代などには「龍神社」と普通と呼ばれていたようです。

創建ははっきりしていませんがかなり古いことは確かです。こちらの社殿は文久二年（1862）に消失したと言われています。またこちらの神社に伝わる染谷十二座神楽（4月寒施）は石岡市の有形民族文化財に指定されており、毎年9月の石岡のおまつりの時の中にも常陸国総社宮でも披露されます。地元の小学生が巫女役選ばれます。

また、神社への登り入口には手水舎がありますが、水はほとんど流れていません。

雨乞いの山がいまは削られて泣いています。村上・染谷地区の地下は硬い岩盤で井戸を掘るのも大変だったようです。しかしこの山がもたらした水は古くから枯れることもなく人々の生活を潤してきたのです。染谷の名前も染物職人が多く住んだことで名づけられたのではないかと思います。

す。(正確ではありません)

一の鳥居からしばらく山道を進んだところに二の鳥居があり、ここから石段で急坂になります。階段を上ると、そこに岸壁にしがみつくように神社の拝殿と本殿があります。

この岩は屏風岩といわれる岩肌ですが、しめ縄も張られ岩が信仰の対象です。岩盤の途中に「滝水路」という石碑が置かれています。昭和27年に置かれたものですが、昔は、ここを滝のように水が流れていたのだと思います。今は面影もありません。

一方、村上佐志能神社は「村上社」とも呼ばれています。村上には昔から多くの人が住んでいて、村上千軒とも言われたとの話が残されています。そして村上地区には湧き出した泉に「親は諸白、子は清水」の伝説も生まれて、石岡は酒造りにも適した場所だったのです。元々今龍神山と呼ばれている山は「村上山」と呼ばれていた時期もあったようです。ただそれがいつ頃の事なのかはよくわかりません。

村上佐志能神社は山の麓で民家の途切れたところの広場に鳥居があります。そして、昔はこの鳥居の正面側にもつと参道が伸びていたようです。今は横から入るような形になっています。初めての方は少し地図を調べていかないとわかりにくいですが、一番山側に並んでいる普通の民家をそのまま進むと自然に神社に入っていく感じですよ。木々に囲まれた鳥居をくぐって正面に拝殿があります。

鳥居の手前に湧水(御神水)があったということですが、今ではかつての清らかな水も流れておらず、わずかに水が溜まっているだけです。

拝殿の裏には本殿があり、立派な龍の彫り物も見ることができます。

この本殿の裏手に更に山の方に入っていくように鳥居がありますが、道は特に整備されていませんので木々や岩につかまって登ることしかできません。山の上の方にお宮(奥ノ院)が祀られています。

さて、石岡の龍神山ですが、昔は真ん中に峰がそびえていましたが、今は左右に判れ、年々小さくなつていくようです。市が碎石業者に山を売ってしまったためにだんだん削られていくのは寂しいものです。

龍神山は昔から雨乞いをする山でした。そして信仰の山でもあり、清らかなる水を常陸国の国府へ供給してくれるめぐみの山でした。

説明によると、染谷と村上の佐志能神社は元々一つの神社であつたようです。最初にあつたのが染谷の方なのか、村上の方なのかはどうも調べてもはっきりしません。ただし、村上と染谷は、元は同じ村であつたのが、途中で二つに分かれ、神社も分かれたというのです。しかし祀っている神様は両社合わせて一対となっています。それは共に雨乞いの龍神であり、染谷は高龍(たかおかみ)神(雌龍)、村上が閼龍(くわおかみ)神(雄龍)という雌雄の雨を降らせる竜神を祀っています。「おかみ龍」という字は雨かんむりに龍です。また古事記では「淤加美」と書かれるようです。ただこちらの竜神は神社の配神で、主祭神は「豊城入彦命(とよきいりひこのみこと)」です。しかし村上社の方は「村上大神」であつたり、「日本武尊(やまとたける)」であつたりもしています。

龍(おかみ)神は、神話ではイザナミ(伊邪那岐神)が

カグツチ(迦具土神)を斬り殺した時にその血から生まれた神とも言われているようです。また、高は山の上であり、閼(くわ)は谷間を表しているともいわれ、対の神、雌雄の神です。

ただ、高龍神は京都の貴船神社の祭神で、奈良県吉野の丹生川上神社には上社が高龍、中社が罔象女神(みずのはめのかみ)、下社が閼龍神を祀っているようです。

(三) (丸山) 佐志能神社

石岡市と合併した旧八郷町の中心部柿岡近くに、もう一つの「(丸山) 佐志能神社」があります。この佐志能神社も山の中腹にあり、丸山古墳と共に一体が公園風になっています。車でこの神社のところまで登れますが、道を知らないとい少し狭い山道なので進入には少し躊躇してしまいそうです。

一方、神社へ歩いて行くには、麓に鳥居があり石段で登るようになっています。しかし車は下に置けません。

この神社の隣には丸山古墳があり、この古墳と一体となった神社と感じます。丸山古墳の説明では「豊城入彦命」の奥津城(墓)と書かれています。豊城入彦命は古墳時代に東国の平定のためにやってきて戦った人物とされますが、この墳墓としてはこの丸山古墳以外にも群馬県前橋市にある総社二子山古墳などが考えられています。しかし大和朝廷が東国に進出した初期の話ですので、よくわかっていません。ただ、4世紀末〜5世紀初めのころの築造と書かれていますので、かなり古いものですが、豊城入彦が東国制定にどのあたりまで、いつごろにやってきたのかなどは解釈で別れますので、豊城入彦命の時代より後の時代の築造ではないかと思えます。それより、前に書いた

ように、勇ましいという意味の「曾志」に「公」という姓を与えて「曾志乃公」（佐志公）といっていたのが訛って「佐志能」となったというような解釈などから「佐志公」の墓などという方が真実味を帯びます。

古墳の前方の広場に万葉歌碑が立てられています。

「庭に立つ麻手刈り干し布さらす 東女あづまをみなを忘れたまふな」常陸娘子
これは石岡小学校にある歌碑と一緒です。

(四) 佐白山（笠間）佐志能神社

笠間の佐白山の城跡の天守閣のあたり、山の一番高い岩の上にこの神社が祀られています。昔は神社周りをぐるっと回ることもできましたが、東日本大震災で、神社の基礎や足場がかなり危うくなりまわりに近付けなくなっていました。少し歴史を見てみましょう。まず鎌倉時代の初め、笠間の佐白山には正福寺という寺があり、百坊と呼ばれた僧兵を抱えていました。そしてこの僧兵たちと、七会村（城里町）にある徳蔵寺の三百坊の僧兵との間で、しばしば争いを繰り返しておりました。

そこに宇都宮の藤原家より藤原時朝が乗り込んできて、徳蔵寺の僧兵を滅ぼし、佐白山に城を築きました。そして時朝は笠間氏を名乗りました。

（1220年頃）

そして、山の上に笠間城が建てられたために、山の上にあった祠（佐志能神社は下市毛宇田宿（黒巻）に遷されたのです。ですからこの神社は1220年より前にこの山の上にあったことになります。そして、明治になり笠間城が廃城となり、この神社もとの山の上に戻されました（明治5年）。

さて茨城県では28座の神社がのっている延喜式（927年）の式内社の中にある「佐志能神社」が4つの神社に分割されたのかどうかは正確にはわかりませんが、どの神社も正式な踏襲神社といってもおかしくなさそうです。

さて、常陸風土記の那賀郡のところに書かれている「くれふし山の蛇」という説話があります。

『茨城の里は、北に高い丘があり、くれふしの山といふ。この里に、昔、ヌカヒメ・ヌカヒメといふ兄妹がゐた。ある夜、ヌカヒメが寢床にゐると、名も知らぬ男がゐて求婚し、朝帰っていった。一晩で夫婦となり、やがて子ができたが、生まれた子は小さな蛇だった。

蛇の子は、昼は押し黙ったままで、夜になるとヌカヒメに語りかけた。ヌカヒメと兄は、神の子ではないかと驚き、清めた杯に蛇を寝かせて、土の祭壇の上に安置した。

ところが、次の夜には、杯からはみ出すほどの大きさになってゐた。そこで、もっと大きな平瓮に移しかへたが、次の夜には更に大きくなってゐた。こんなことを何度も繰り返してゐるうちに、家にあるどの器も合はなくなってしまうた。ヌカヒメは、「あなたの不思議な力を見てゐると神の子なのだと、いふことがよくわかります。わたしたちの力では育てきれません。どうか父の神のところにお行きなさい。」

と蛇の子にいと、蛇の子は悲しんで泣いて、涙を拭ひながら「おっしゃるとほりですので、お言葉にしたがひます。けれど一人で旅するのはかなはぬことですから、できればもう一人の子どもとともに行かせてください。」といった。ヌカヒメが「わたしの家には、わたしと兄しかゐません。

見ればわかるでせう。あいにく誰も一緒には行けません。」といふと、蛇の子はうらめしさうに口をつぐんだ。

別れのときになって、蛇の子は怒りを押さへきれず、雷の姿になって、伯父のヌカヒコを殺し、そのまま天に昇らうとしたが、これに驚き怒った母が、平瓮を投げ当てると、平瓮の呪力で蛇は昇ることができず、そのままくれふしの山の峯にとどまることになった。蛇の子が眠った器は、今も片岡の村にある。兄妹の子孫は、社を立てて蛇を祭ったので、家が絶えてしまふことはなかった。』

（口訳・常陸風土記より）

実はこの話と全くそっくりな話がこの石岡に伝わっています。龍神山の麓の「片岡」地区です。この石岡の片岡に伝わる話はくれふし山が龍神山になります。

今ではくれふし山は水戸市の「朝房山」と考える意見が主流ですが、石岡の龍神山もその候補地の一つなのです。また、「茨城」の名前の起こりはかなり古い時代の「茨城群」から始まっていますし、平安時代10世紀の辞書「和名類聚抄（わみょうるいじゅしょう）」では「茨城」の読み方として「牟波良岐」という字が与えられていますので、イバラキではなく「ムバラキ」だったと考えられますので、笠間市小原あたりに最初の頃の茨城群の群衙があったのではないかと思います。笠間の話が石岡に伝わったのも頷けそうです。群衙の移転とともに、この佐志能神社もまた龍神山を囲む地に移ってきたのではないかと思われます。まあこの話も、かなり大昔の事ですから信頼できる記録はなかなか見つからないでしょう。

市指定文化財(三)

兼平智恵子

今から一五〇年前の一八六八年、明治元年を迎えた日本は近代国家として歩み始めました。

石岡市ふるさと歴史館では一五〇年を記念しまして、題して「学問手習之儀若年之子弟第一に可相励」の企画展を行っています。

「勉強第一、一所懸命取り組みなさい」という意味で、江戸時代の頃より日本各地では藩校や寺子屋が設けられ、武士から庶民まで読み書きそろばんや礼節など生活の基礎知識、時には漢学や国学など学びました。

石岡でも江戸時代から教育が大事にされ常陸府中藩が設置した学問所や各地に作られた私塾で多くの人々が学びました。今回の展示会は江戸から明治にかけて石岡の人々が使っていた教科書や学習道具が展示されています。

人の名前によく使われる漢字を集めたもので書道の手本として用いられた名頭字盡(みようずじつくし)。

江戸時代の一般的な教科書の一つで、一月から十二月までの書状をテキストとして収録、時候の挨拶など、手紙の書き方の手本であると同時に日常的な用語を学ぶ教科書、庭訓往来(ていきんおうらい)など村田宗右衛門家文書から、その他、数種類の教科書等が紹介されています。

初代村田宗右衛門は明和七年(一七七〇)近江国日野町に生まれ、文政十二年(一八二九)八月二十八日に関東に下向し、常陸国府中(石岡)に住んだ。府中では大和田家の倉庫を借りて醸造業を営み、酒造品を「富士一山」と称した。その後守木町に土地を求め酒蔵を建設、醤油も醸造を始め巨万の富を得、家業は二代・三代と受けつがれ、江戸末期

から明治中期にかけて、江戸から仙台までの街道中最大の豪商といわれた。

どうぞ石岡の皆さんが使っていた教科書や学習道具を通して石岡の江戸・明治期の教育をご覧下さい。

石岡市ふるさと歴史館、電話〇二二九・二三・二三九八、期間五月二日(水)～七月二九日(日)、休館日月曜日(祝日の場合翌日)

市指定文化財の紹介に入ります。

○盛賢寺阿弥陀堂

有形(建造物)
指定 昭五三・九・十一

所在地は井関一〇二四、高浜神社から車で約七、八分位です。高浜神社より愛郷橋を渡り、消防署、交番を通り過ぎると間もなく左カーブ、この道なりで途中上り、下り坂あり、右側にある関川小学校をとおり過ぎると、間もなく下り右カーブおりたところに代田の大人形が睨みをきかしています。そしてすぐの関川・代田交差点、ここには四角地藏堂と言う珍しい名の四つ角をお守りする地藏様が鎮座しています。右折してゆるやかな上り坂、間もなく右側の盛賢寺に到着。偉大な力を持つ金剛杵(こんこうしよ)を手にし、二体並んで入口を守る二王、威圧的な忿怒の相に、思わず息をのむ、潜ると阿弥陀堂の壮大で風格のある佇まいに合掌、そして空に届くような宝篋印塔を見上げる。周囲の樹木が、それらを優しく包み込んでいた。

阿弥陀堂は創建は明らかでないが弘安年間(一七八〇～一七八八)に、京都三寶院の流れをくんだ祈禱道場として建立され、修行の場であったと伝承されている。江戸時代に入り水戸領となつてからは息災延命、家内安全、五穀豊穡の祈願所となつて繁栄し年二回一月十五日と八月十五日の縁日には

近隣近郷の善男善女で賑わい、特に一月十五日には新婚者が必ず参詣するので「嫁くらべ」とまで名づけられた。門前には「小松屋」「島田屋」「つたのや」などの旅館(現在は屋号が残っている)があり、高浜に來た商人たちなど、多くの参詣者があり大変なにぎわいをみせたという。

一六七〇年頃、藩主水戸光圀公が領主巡視の際に、この阿弥陀堂に立ち寄られ繁栄ぶりに比べ山号も寺号もなく、阿弥陀堂だけの名称に驚かれ、一六八〇年頃、那珂の額田にあった靈通山盛賢寺をこの地に移し真言宗豊山派長谷寺直末として今日に至っている。

住職さんに珍しい参詣について伺いました。盛賢寺阿弥陀堂では表の本尊様と裏には裏本尊様(小さな格子の窓がある)がいらして、表で本尊様に参詣できないときは、裏から参詣できますとのことでした。

大型の宝篋印塔は江戸後期、有志の皆さんによつて建立された。又、市指定文化財木造仁王像は後程ご紹介したいと思います。

※参考資料 ふるさと歴史館企画展資料・石岡の歴史と文化

・どつさりの緑の中ゆく

智恵子

ひとまわり・変わったものは… 伊東弓子

十二周年記念の文は、先月載せる筈だったのに、何処で勘違いしたのか、忘れたのか、今回綴り、心新たな出発としたい。

梅のあと、次々に花が咲き後を追うかのように散り、去ってしまった。木の葉や草も次々に里山

を彩っていた筈なのに、ゆつくり新芽、若葉、新緑と移ろうさまを楽しむ間もない中に、深緑になつてきた。こうした自然の営みと人間社会の目まぐるしさの中でも、「ふるさと風」は確り足跡をつけて歩いてきた。

ふるさと風に参加したあの年は戊午。私は六十代前半。若かったと今振り返る。戊年生まれの次男は三十代前半だった。あの孫も十代に入つて間もなく、未だ私の近くにいた頃だ。次男も娘との係りが多かった頃だった。近くにいながら話する機会もよく少なかった。会報ふるさと風の誕生を切っ掛けに、そこに共通点を持ちたいと会報を届けたことがあった。「読む暇がないから」と断られた。それは、それでいいと諦めてから、干支の一回り過ぎたのかと早い時の流れを思つたりする。

ふるさと風のスタートと同じ頃、玉里村も合併して市となった。地域が変わつたのは勿論、人の心も変わつていった。大きい地域に呑み込まれていく不平不満が多かった。私もこうなつた以上と心の転換をする迄には長い時間がかかった。

行動範囲が広がったこと、生き甲斐の活動が始まつたことで友も増え忙しい日々を迎えた。その原動力は自転車。美野里の中心へ、小川の外れへとペダルを踏む足も軽かった。今は大いに違う。まず距離と時間を考えないと気が重い。でも歩くよりは早いか、と言ひ聞かせて出発する有り様だ。また前は犬のことなど気にもせず出かけていたが、今は違う。後ろ髪引かれる思いだ。よく言い聞かせて出かけるが、途中でふーっと考えたりする。己だけ自由に行動しているのが、申し訳ない気がするようになった。繋がれている身の哀れさ、人間の勝手さに後ろめたい気持ち、共存するには仕

方がないと思ひながら、用事を済ませて帰る。家に近くなると大声で名を呼んで帰つて来たことを知らせ、留守番の労をねぎらいながら一緒にお茶にする。こんな思ひは老いた私の気持ちからだろうか。

以前と違つて車道を走るのは恐ろしい。スピードを出してくる車に接触しそうだ。歩道も恐ろしい。狭い歩道、コンクリートの継ぎはぎだらけ、凸凹の段差、車中心の道は立派だ。弱い者に心を配つて作つた道は殆どない。茨城空港に向かう道路は、今度で五本目か、そんなに造つてお金は大丈夫か、それより何の為に造るのか。故郷の道はその地域の人の道であつてほしいが、通過道に過ぎない。その地域の人達のものではなくなつた。美の里地区は広いから道路も多く造られている。玉里地区に二つめの道路が出来たが、二つとも歴史的場所を壊している。住民の人はそれでも便利優先で喜んでゐる。

昼間、農村地域を歩いていても殆ど人には合えない。犬が応えてくれたり、警戒して吠えかられる。幼児は保育園や幼稚園に、学生はそれぞれの学校へ、若い人たちは職場へ行ったのか、余裕のある大人は、講座や研修の名の元にお出かけ。年の大きくなつた老人はケアに、不自由な体になつたら病院や施設に行つてしまつたのか、尋ねても会話することもなく、ポストに入れて音の舌の確認して用を済ます。虚しさが多い。地元の田、畑、山に携わる人はどこへ行つてしまつたのか。

出かければ必ず研修生(外国の人)に合う。蓮田の中で、玉葱畑、芋畑で陽ざしの中、風に煽られ、小雨に顔を濡らして励む姿に合う。声かけ合える人間に合った、よかつたという思ひに包まれる。

朝夕は、小中学校の生徒、高校生に合える。少なくなつたからこそ子供の姿は何よりの楽しみ、一番の幸せを感じる毎日が續いて欲しい。

出島や玉造では、学校がなくなつて淋しいよ、との声を聞く。溜りもそうなり兼ねなかつたが、頑張つて主張してくれた人がいたと聞く。三年後には、小中一貫校になる、玉川地区、栗又四ヶ地区は特に子供との係りを考えていつてほしい。若い女性はツンツクしているし、男性は遅しさがなく格好良さに走っている、と思ひ込みがちな私。近づいて理解する努力をしよう。心温まる話もある。畑を借りて野菜を作る二、三人。教えて貰つたり、お喋りをしたり、手伝いあつたり、お茶を飲んだり、青空の下、緑と土に包まれて憩いのレストランだ。こういう仲間と場所は形にとらわれず、お金をかけず、何処にでも作れる筈だと思つた。是非皆さんにもお勧めだ。

山はとつくの昔に荒れ放題になつていた。畑も見放されている所が増えた。奇麗になり始まつたと見ていると、広範囲が太陽光発電の設備で支配されていく。そういう光景が増えている。山林が丸裸になれば、霞ヶ浦の水にも影響するだろうに。目先のことしか考えていない現代人。

老夫婦でも二人揃つてゐる時は、まあまあだが一人になると忽ち荒れてくる。力もなくなつて、気持ちも弱つて生活している様子が外から見てもわかる。誰も助けてはくれないのだろうか。老人は置き去りにされていくのだろうか。こういう家、屋敷が多くなつてきた。一方若い人は新しい家を建てている姿があちこちで見られる。人口が増えた。子供が増えたと喜んでゐる。その地域を故郷として豊かな人間関係をつくつてくれるのかな。家族が自分達の大切な場所として、子育てしてい

つてくれるかなと思いつながら見て通る。ここで育った子供たちも、成長したら何処かへ行ってしまうのかな。やがて今の親も老人になり、おいてけぼりになってしまうのじゃないか。何てことを思ったりする。

店も次々となくなっていく。ふるさと風を樂しみにしてくれていたラーメン屋のご主人も亡くなった。娘さんが時々来ていたが、続かなくなりやめた。あるレストラン、男女を問わず熟年層が集っていたが人影が減っていつて店仕舞いとなった。床屋、パーマ屋も看板を下ろし、建物だけが残っている状態だ。食堂、居酒屋、雑貨屋と小さい規模の店が次々に戸を締めた。ふるさと風を置かせて貰っている店の扱い方もさまざまだったが並べ方を工夫してくれたり、チラシをコピーして沢山並べてくれたり氣を使ってくれる場所もあり、有難く思う。ある店で、ふるさと風を樂しみに貰ってきと呼んでるよ。あんたにあんな趣味があったんだね。と言われた。呼んでくれた人がいることに、よし！また元氣出して書こうという氣持ちにさせてくれる励みとなった。

十年一昔。変わっていく、進んでいくことに追いついていけない自分が情けないとも思うが、次への発展に向かっていく時代に着いていこうと前向きになる自分がここに居るのも事実。氣負わずに行こう。

月の最後の土曜日は楽しい。風の会の仲間9人の駄乗り会だ。何を言ってもいい話し合いだが、初めは緊張していた。勇氣があるのだった。それぞれの豊かな経験と知識から話される人達。時には厳しく、時には優しく笑いが出たり、緊張が走ったり、真面目な話しの集いの一員であることを誇りにしたい。

学び合う集いを持ちましょう。聞いたり話したりしている中に、意識も育っていくでしょう。小さな機械を朝から晩まで見て満足してないで、人と人との顔を見ながら話していきましょう。特に女の人は感情が先走って、他人の悪口が主のお喋りが中心になりがちです。もつと豊かな話し合いが出来るよう訓練していきましょう。

補助金を貰うことを考える前に、自分達で出来ることは何かを話し合う仲間をつくっていきましょう。話しが出来るような仲間が出来たら一緒に活動していきましょう。私も貴方も何時かは髑髏の姿になるのですから、その前に…。

私の学んだ労音の歴史から： 木下明男

私は1965年労音運動（職場サークルを主体とした音楽運動）に身を投じた。まだ20代の前半で東京の品川区大井町にある日本光学工業株式会社に勤めていた。そのころ職場や会社、社会の諸事情の中で労音のサークル活動に誘われたのでした。サークルの代表として地域活動にも参加し、次第に労音運動に感化されていく。

労音時代に学んだ音楽運動の歴史を思い起こしてみた。東京の各地域から集まった若者たちが「東京労音学校」に参加し、勉強を始めた。その時に学んだテキストから。

東京労音学校テキスト

目次

第一期（1949～1954）労音の創立樹

（1）創立期の社会情勢と労音を発展させた力

（イ）戦後の情勢

（ロ）創立期の社会情勢

（ハ）創立期の音楽情勢

（三）労音を発展させた力

① 関西労音の誕生

② 東京労音の誕生

（2）第二回東京労音総会の意義

（イ）サークル、地域会議、総会制度の確立

（ロ）労音運動の三つのスローガンの確立

（ハ）創立期から学ぶこと

第二期（1955～1960）労音の全国体制の確立

（1）この時期の社会情勢とその特徴

（2）第一回全国労音連絡会議の結成と労音運動を分裂させる日本芸能文化センター

（現在の音協）の設立

（3）第二期の東京労音の主な活動 — 三つのスローガンはどう実践されたか —

① 一人の会員が一人の会員を増やそう「白鳥の湖」例会で6000名拡大

② 「企画運営は会員の手で」「国民音楽を育成創造しよう」

（a）ベートーベン「第九」、シヨスタコーヴィッチ「森の歌」の大合唱を通じて日本の歌を

（b）年間企画方針、例会の選択制、オーディション等新しい企画方針の確立

（c）海外との文化交流、サークル・地域の音楽運動の発展（オイストラック労音アンサンブルの誕生）

（d）不当な入場税・法人税に反対する運動

(4) 安保反対闘争と世界音楽祭反対運動

第三期(1961~1965) 労音運動の基本任務と実践の時期

①第七回全国労音連絡会議で「労音運動の基本任務」と「100万人の労音運動」が決定された意義

②日米文化教育合同会議と第一回伝統音楽研究集会

③民族的・民主的・大衆的な音楽運動の発展
第四期(1965~1970) 労音運動の昂揚と停滞

(1) 第一次二か年計画と東京労音の停滞

(2) 後退から前進への体制づくり

(3) 二十年間の労音運動が果たしてきた役割

第一期(1949~1954) 労音の創立期

(1) 創立期の社会情勢と労音を発展させた力

(イ) 戦後の情勢

太平洋戦争が日本軍国主義の敗北に終わり、アメリカが日本を占領し新しい状態が生まれた。そして天皇制の基礎が崩れ、これまでとは違う政治的・経済的・文化的条件が生まれた。敗戦までを絶対的天皇制の時代と言うなら、この時代はアメリカによる占領支配の時代だった。

沖縄・小笠原をアメリカに完全に占領された国内には、無数のアメリカの軍事基地があつて、そこにいるアメリカ軍は世界の歴史に類のない特別の権利「地位協定」を持っている。日本は主権を侵され、政治的にも経済的にも軍事的にも文化的にもアメリカに従属され、半ば植民地的な状態に陥れた。これは日本の歴史にとって嘗てない屈辱的な状態を作り出した。

何故そんな事が起きたのか？ 日本が無条件で受け入れた「ポツダム宣言」を真に実行すれば、

そんな事には成らなかった。敗戦で力の弱まった独占資本は、アメリカ帝国主義と協力して日本の独立と日本人の生活をアメリカに売り渡し、屈辱的な安保条約を1951年9月に結び、アメリカの力を借りて日本人に対する支配を続けようとしたからです。アメリカの占領が形式的に終わった後も占領と同じ状態が長く続くことになった。それは文化、特に音楽にどういう影響を与えたのか？

いままでも極端な外国崇拜と極端な国粹主義の二つの矛盾する傾向を持っていた天皇制が、敗戦でその基礎が崩れた。そして極端な国粹主義の基礎がなくなり、文化全体に大きな影響を与え音楽にも大きな影響が加わった。それは国粹主義が弱められた代わりに外国崇拜の方は一層強められた。此処で注意しなければならない事は、不自然な国粹主義の基礎が弱められた時に、政治の指導者たちは、国民の民族的な自覚を高める政策を取らずに、逆に弱める政策を取った。益々外国崇拜の傾向が強められ、日本が文化的にアメリカに従属する条件が故意に作り出された。これが敗戦日本の反動勢力が日本文化に対して一貫している態度です。結果として現れた現象は音楽の面では、アメリカの退廃的な音楽が津波の様に流れ込んだ。これは日本人の民族的自覚と階級的自覚を抑え込み、眠り込ませるために故意に取った政策です。

(ロ) 創立期の社会情勢

労音が勤労者の手で作り上げられた時は、平和憲法が悉く踏み躪られた時期だった。団体等規制冷により、労働者の民主的権利がアメリカ占領軍によって一方的に奪われ、27万人と言う大量の行

政整理発表され、労働運動を弾圧するための三鷹・下山・松川事件が続々と起こされ、共産党幹部の追放(レッドパージ)等の嵐が吹きまくり、人民と労働者の生活と権利は益々奪われた。アジア人とアジア人を戦わせるアメリカの侵略政策の下に、日本をアジアの侵略基地にすることが大きな狙いです。アメリカによって引き起こされた朝鮮戦争を準備するあらゆる手段が着々と準備され、朝鮮戦争では日本が最大の前進基地となった。

こうして日本をアメリカの膝元にガッチリと結びつけるサンフランシスコ体制がアメリカと日本独占資本の間に結ばれ、日本は事実上の従属国なっていた。一方、労音創立の年に嘗て植民地であった中国が解放戦争の末、権力が人民の手に移り、アジアの情勢が一変し、その年にはインドネシア共和国が生まれる等、アメリカ帝国主義に大きな打撃を与えた。1954年には

、ベトナム人民がディエンビエンフーの戦いでフランス帝国主義を破り、長い植民地支配から解放され、北部はベトナム民主共和国となり、ジュネーブ会議で一年後には人民投票により南北統一が決定され、アジアの解放闘争が歴史上嘗てない勢いで進み始めた。帝国主義戦争を禁止し、原水爆を禁止するストックホルムアッピールが日本全国で640万人の署名を集め、アメリカのアジア侵略の出鼻を挫き、朝鮮戦争を休戦させる力となった。1952年には、全国的な規模で破防法(破壊活動・暴力防止法案)反対ゼネストが組織され、翌1953年にはサンフランシスコ体制を築いた吉田内閣が倒れた。

(ハ) 創立期の音楽情勢

戦後の労働運動の発展、民主主義運動の発展は

戦前の天皇制のもとで禁止されていた音楽に対する国民の要求を大きく高めた。東京では、日響・東響・東フィルの三つのオーケストラと藤原・二期会の二つの歌劇団が活動を始める。毎日演奏会が何処かで行われ、一方外国の世界的演奏家、メニューヒン（＜）トラウベル（指揮） ヒッツシエ、カラヤン（指揮） バックハウス（P） ハイフェッツ（V）等多数の演奏家の来日続いた。しかし会場は、日比谷・共立・日本青年館しかない会場難が続き、入場税は15割と言う高額、入場料はハイフェッツで3000円（現在では10～15倍）と言う高額さです。

勤労者にとつて、音楽会は高根の花で、僅かにレコードコンサート等で要求を満たし、また中央合唱団やうたごえが生まれ労働運動と結びつけて労働歌や闘いの歌が盛んになり、映画「シベリア物語」の「バイカル湖のほとり」「カチューシャ」も勤労者の中で歌われるようになった。わらび座の前進《海つばめ》が文工隊として活動を始めた時期でもあった。

一方、勤労者の中には良い音楽を聴きたい、歌いたいと言う文化的要求が大きく高まった時期だった。他方、アメリカから大量の退廃的音楽が意図的に持ち込まれ「ブギウギ」「マンボ」が流行られ、日本独占資本がアメリカを憧れる気分を煽り立て、岡晴夫の「あこがれのハワイ航路」「東京の花売り娘」が歌われ、朝鮮戦争の前夜には「トンコ節」が流行った。丁度満州事変の前夜「ネエー・ネエー愛してちょうだい」「ネエー小唄」「セクシー・ムード」の翌年に戦争は始まった。流行歌がこのようなに国民の目を政治から切り離すのに意識的に使われた。朝鮮戦争では、糸へん、金へんの戦争景気を煽らせて「お酒飲むな、お酒飲むな」意

見なれど……」「やつとん節」「芸者ワルツ」を流行らせ、1954年には平和憲法を踏み躪り、アメリカのMSA援助（余剰農産物を国際価格で日本に売り、その代金を再軍備の費用）の基に自衛隊が発足し「死んだはずだよお富さん、生きているとはお釈迦様でも……」とか、軍歌を流行らせ軍国主義復活を煽った。

つづく

奄美群島

小林幸枝

奄美群島は沖縄県だとズツツと思ひ込んでいた。本当は鹿児島県だということをつい最近知った。奄美群島の文化は、沖縄にいていて鹿児島県と知ってもまだ信じられない程だ。

鹿児島島の南に浮かぶ四十八の島々の奄美群島は明らかに沖縄圏の文化そのものです。事実、四百年ほど前には、奄美群島は琉球王国に属しており沖縄の一部でした。それが薩摩藩に編入され、明治維新の廃藩置県で鹿児島県となったのだ。

奄美群島は、喜界島、奄美大島、与路島、加計呂麻島、請島、徳之島、沖永良部島、与論島からなります。しかし、奄美の島唄などは、沖縄の唄と言っても全く不思議はない程です。三線を弾いての歌い方や踊りは正しく沖縄です。

奄美が沖縄圏であることを示す例として、与論城は琉球王朝の城跡があります。現在残っているのは石垣だけですが、沖縄の石組そのままです。赤瓦とシーサーの民家も、風習、言語、食文化も沖縄そのままと言って良いでしょう。

料理は、沖縄と薩摩の食文化がまじりあっていて、一見沖縄風にも思えますが、薩摩の味付けな

どが混ざり合って、どちらにも違った味が楽しめます。

沖縄、奄美が大好きな私ですが、奄美が沖縄県ではなくて鹿児島県と知って、今頃になってびっくりしてます。

パチンコ考現学口

菊地孝夫

現在のパチンコ台やパチンコ店のシステムは日々進化を続けている。

先号でパチンコ店を設計したと書いたが、そのいきさつなど詳しく書くことにしよう。

読者の中にはパチンコなどやった事無い人が大半であろうから。

今から三十年ほど前のことになる。

現在のようにADが普及していた訳ではなく、ドラフターに向かってトレーシングペーパーの上に鉛筆で書いていくアナログな仕事だった。

A1又はA2のサイズの半透明の紙に縦横に線を引いていく。

A1版が新聞紙を拡張した大きさ。A2はその半分、A3はそのまた半分という具合。その半部分がA4で大学ノートのサイズ。

鉛筆も硬度の異なるものを数種類用意し、芯研ぎ器でゴリゴリ研ぎながら線を引いていく。図面台の左右には三角定規、テンプレート、三角スケール、電卓、設計資料が手の届くところに配置してある。

当時ものADはあったが、機械設計用に作られたものを、建築に流用したものであり、電気図面

に使うには、物足りないものだった。まだよちよち歩きの段階で、ソフトも碌なものが無かった。

しかも、周辺機器を合わせると、一千万円余り掛かってしまう。余程の規模の会社でなければ、導入は無理だった。たまたま、一千万円ほどの余剰金が入り社長から買ってもいいと言われたが、右記の理由で導入を見送った。

パチンコ店くらいの規模になると、A1の図面が二十枚前後必要になる。

図面を引きながら同時並行的に、他の職種とのすり合わせ、施主との打ち合わせもしなければならぬ。

更に、この物件では、実際の工事も請け負ったため、現場に仮設の電気をひかなければならない。火災報知機、消火器を設置するので、管轄の消防署と事前協議が必要となる。その為には消防法、消防条例等を調べなければならない。

当然のことながら、電力会社とも事前協議が必要となる。

この物件の場合、施主の要望で、通常使われているネオンサインの代わりに、店舗の周りにぐるりと店名を配置し水銀灯を使って、カラフルなレインボウカラー―夜空に浮き上がらせて欲しいとのことだった。調べたが、そのような照明器具は既製品には無く、メーカーのエンジニアを呼んで、何度も打ち合わせをした。

光の三原色の水銀ランプだけでは光量が不足なのでもう一つ白色の水銀ランプが必要となる。この四台の照明器具を適宜に配置すれば手元のライントコントロールで、虹の七色を自在に作り出せるというわけである。試験的に四台の水銀灯に三色のフィルターを掛け三台の調光器で様々な色を出すことに成功した。

(結局この案は予算オーバーで不採用になった。随分と時間と金がかかったが)

設計に当たってはしばしばこのような事があり、折角の苦心が報われないケースが多い。大体は、施主の我が儘や、あるいは「先生」と呼ばれる一級建築士の連中のせいである。一級建築士の大半は所謂デザイナー、芸術家であり、以前問題になった耐震偽装問題に象徴されるように、構造計算のような工学的なものはそれ専門の構造屋に外注している。二十余年電気工事に携わったが、電気工学に精通している人には出逢った事が無い。本来なら、電気、空調、給排水等々建築に関わる全てにわたって知らなければならない筈なのに。

パチンコ台と云うのは4台でワンセット、これを十セットが一島。この島が十で400台。その頃はまだスロットマシンは無かった。現在の郊外型の大規模店舗に移行する過渡期であった。

夫々の島やパチンコ台に電源の配線や配管をするわけだが、最後からの配管を付け加えるように要請があった。予備の配管は既に織り込み済なので全く余計な配管である。

ああこれが例の、コントロール用の配線をするためなんだとピンときた。

工事が終盤になると、工事関係者全員外にだされる。中にはマネージャーとメーカーの人間だけ、それ以外は立ち入り禁止である。この間に中央のコンピュータと各パチンコ台をつなぐ配線をするわけである。これによって自由自在に出玉を操ることが出来る。勿論これは違法である。現在もそのようなことが行われているかどうかは分からない。半ば都市伝説のように語られているだけである。

【風の談話室】

《読者投稿》

やさと暮らし (16)

さと女

麦秋、もうこの様な季節、畑の景色が見る間に変わって行く。小麦畑はまだ青々と、パッチワークの様。

●田植えが済んで

久々の雨で草花がイキイキと、雨にはなぜか青が似合う。田んぼも水が張られ、田植えの季節になった。お隣さんは、稲苗が伸びすぎてしまったと嘆いていた。水が張られた田んぼからはカエルの大合唱が聞こえる。カエルさんは何処から集まって来たのだろうか。これでもかと言うほど競って鳴いている。田植えが、あつと言う間に終わってしまった、昔の様なお祭り騒ぎはない。夜の田んぼは、行き交う車のライトが映りキラキラ美しい。そしてカエルの大合唱。昨夜コロの散歩をしながら気づいたのだが、カエルも泣きっぱなしではない様だ。10分置きに合唱のうねりが。指揮する親分カエルでもいるのか再び大合唱が。この大合唱は何時頃まで続くのだろうか。

●てんこ盛りの山菜と干し野菜

楽市さんからこしあぶらが届いた。独特の香りがあり季節を感じさる物だが、やたらには手に入らない。直売所でも中々お目にかからない。タラの芽が山菜の王様で、こしあぶらは女王だそう。やはり、天ぷらかな？他の材料を探しに家周りを探す。あるわ、あるわ、沢山の材料が、コーンフリ、三つ葉、ウド、セリ、山椒、いくらでもある。それらを少しずつ摘んで、夕の食卓に並べた。

そして、今年もタケノコが食卓を賑わせた。タケノコには失礼だがもう十分頂いたので当分はいいや、と言う感じ。そんな時友人から干しタケノコの話聞いた。早速あく抜きした物をザクザク切って干してみた。ついでに人参やシイタケも。天気も良く風もあったので、夕方にはカラカラになった。姉からは、露も干すと美味しいよ、と、露を3分茹でて半日程干して煮ると味が染みてとても美味しい、しかし、夫はこれらの山菜はくせのあるもの超苦手、誠に残念この上なしです。直売所へ苗を買いに行く、夏野菜の苗は沢山並んでいた。ナス、インゲン、ゴーヤなどの苗を買う、雨が降りなので植えるにはいいタイミングかもしれない。帰り道無人の販売所で鶏糞を1袋買った。お金を入れる箱が置いてあり、其処に200円入れるようになっていた。同じ場所には卵の自販機もありました。直ぐ近くには大きな養鶏所が。

●素泊り民泊（田舎家）

昨夜は友人たちと蕎麦屋《まんまや》で宴会。友人は東京の労音時代からの仲間。彼等は、こちらに転勤になり、その後私達も越えてきて、再び石岡での交流が始まった。今回は彼の同僚親子がやってきて、4人で田舎家に泊ることになった。久しぶりなので次第に大宴会となつてしまった。続きは田舎家の方と言う事で、酒瓶を抱えて移動、親と娘夫婦どんな夜になるのやら。翌日は、コンサート。レストラン【ティアラ】に於いて恵莉子さんのディナーショー。伸びやかな美しい声で1曲1曲心を込めて届けてくれました。満席のお客様も、まるで自分の身内を見守るような暖かい声援を送り、和やかな雰囲気の中13曲を歌ってくれました。石岡生まれ、石岡育ち、今後の活躍

がすごく楽しみです。(Youtubeでも曲程入っていますので、山本恵莉子で、是非聴いて下さい)

さらに翌日、何処までも続く青空、訪問者と外でリンゴジュースを。柿の木の若葉を見ながらあれやこれや、たわいのない話をしてジュースを飲んでいると隣の猫も必ず挨拶に来る。なんとも長閑なのはいいが、先日の雨で草木の勢いが凄いい、これらをどうやつつけて行くか、戦いは始まっている。

●雨模様の陶炎祭

ひんやりとした空気、昨晚はとうとう暖房を入れた。此の連日の雨で喜んでいるのはタケノコ、すくすく伸びる、一晩でどの位伸びるのか、夜、犬の散歩で竹藪に入ると水を吸う音がするような気がする。タバコ畑も水分を沢山吸ってつやばやしている。5年位前だったか、5月5日の日に、ピンポン玉位の雹が降って、たばこの葉にも穴が、我が家の車にも被害が出た事など思い出した。久々の雨、今日は笠間の陶炎祭に行く予定なのに、早く止んでくれると良いが。それにしても雨には菖蒲類が良く似合う。アイリスが次々と咲き、あやめが咲き始めた。雨にはブルーが良く似合う。29日からの一週間に渡る笠間の火祭り、昨日は予報どおりのお天気となり昼頃まで霧雨が残つてしまった。朝一番で会場に着きマップを見ながらそれぞれのテントの作品を堪能した。ブラブラ歩いていると、久しぶりの人とも再開、それがまた楽しい。昼頃帰る道路は、笠間に向かう車か、渋滞していた。

●我が家の庭(畑)に咲く花たち
次々とバトンタッチ「私ヨ、私ヨ」と競っている。

る、華麗に咲く花もあれば、ひっそりと咲く花もある。咲き終わって来年に備える花もあれば、一回限りのお披露目の花もある。みんな色々、人間もいろいろ。今年は黄エビネが見事に咲いた。エビネは花が咲き終わると姿が消えてしまうので、踏んでしまったり、耕してしまったりで中々綺麗な花を見る事ができなかった。今年は、十分に気を付け大切に見守っていたら、沢山の花が見られた、半分日陰のこの場所が良かったのかもしれない。

身近にある植物が白い奇麗な花を咲かせた。木々の間に地味に生えて要る樹なので名前も知らなかった。小さな白い花が固まって咲いて、秋には赤い実をつける。しゃぶると甘酸っぱい味がした様な記憶がある。名前を調べると、どうもガマズミと言うらしい。近寄ると独特の匂いがある。今年は、もっと私に気が付いてよと言うように思いつき咲いていた・・・。太陽に良く似合う花、ガザニア。太陽に向かってパット咲く。先日会った知人の娘さん、まるでこの花の様だった。玄関を入ってひとこえ発した途端、部屋の空気が変わってしまうほど明るい、明るい事この上なしだった。ラジオ深夜便で、今日の誕生花はクレマチス、別名風車鉄扇。そして、花ことは心の美しさ、高潔とか。最近人気のある花で色々な種類の花を見かける。先日栗市さんの庭で見かけたクレマチス。その栗市さんへ、オリーブのママと出かけた。社長は、山野草などの説明をしてくれ、多種多様な変わった草花がたくさん植えられていて、それぞれの季節を楽しませてくれる。庭を楽しんだ後、ログの2階でテイタイム、3方大きなガラスにおおわれていて、周りの景色が一望、何と心地よい空間。メタセコイア並木は、どんどん緑が濃くなっています。

養生日記

堀江実穂

・某月某日

私は幼い頃から、数字、算数、数学が嫌いである。でも考えて見れば、生活の中で私たちは数字の中で生きている。朝起きれば時計を見て今何時だと確かめる。食事もお風呂も寝る時も時計を見て時間で動いている。

作業所に行けば、椎茸を収穫して、何ケース取れたか数える。そして、椎茸は今日何kg取れたかをハウスから戻って計量する。それから細かく椎茸を130g140g計量して袋に詰める。それをタテ五列、ヨコ五列に並べて1ケース25個にする。

数字、数字また数字。数字の世界がどんどん広がっていく。数字、算数の嫌いな私には、数字のお化けが追いかけてくるようだ。

椎茸を福祉工場で直売する時もある。C品椎茸一袋110円、干し椎茸一袋160円。お客様がどつと押し寄せ、椎茸3袋・干し椎茸2袋。さてさて幾らだ。頭の中がパニックしてくる。

私たちは、数字に中で生活しているのだ。

・某月某日

数か月前からタバコを止めた。最初は苦しく、辛かったがだんだん吸わない自分に体が慣れた。最近では、体に有害だったんだなとしみじみ思えるようになった。味覚もはつきりしてきて、食事が美味しくてたまらない。

ただ困ったことが一つ起きた。食べても食べてもお腹がいっぱいにならないのだ。酷い時には、レストランで食事をした直ぐ後、お腹すいた、と言って友達を驚かせてしまう。

・某月某日

私は毎週日曜日に欠かさず観ているテレビ番組がある。19時からやっている色々な障害を持っている人達の生活についての番組である。自分も障害者であるが、もっと大変な生活を送っている人達もいる。その中で、自分は普通に食べたり飲んだり読んだり書いたり体を動かすことが出来る。そう考えるとどんなにか自分が幸せかがしみじみわかる。

私の通所している作業場では、職員も利用者も一緒にテーブルで食事をし、トイレも一緒である。これ当たり前と思われるかもしれないが、他の施設では、食事もトイレも別々になっている所が多いのだ。

すべてが平等と言っても、それがなかなか難しいことが多いのが障害者の現実なのだ。

私の趣味「城の濠や天守台」

下赤昇

私の趣味は、お城の濠や天守台を見て回ることである。

二十歳の頃から、神社、お寺の参道、門構え、石組に魅力を感じ、出張の多い仕事柄、ほぼ全国の城や神社仏閣を見て歩いた。中でも城の濠の石垣、天守台の石垣にはまり、夢中になって回った。

石垣の始まりは、弥生・古墳時代と思われ、朝鮮半島から倭国日本に、丸木の船で冬、北風に乗って渡ってきたと思われる。

石垣の始まりは、山間部の傾斜地を切り拓き田畑をつくることであった。棚田の畦の石組、自然石の野面積が最初と思われる。現在でも地方の山

間部にその石組は残っている。

川から集めた丸びた石を巧みに組み合わせて積み上げられている姿は美しく、人の知恵の見事さを感じ知らせてくれる。

石組みの代表的な築き方を少し紹介すると、最初は川原の石などの自然石による野面積であったが、石割の技術が生まれ、山から切り出した割石による野面積となり、それが進んで亀甲積、打込ハギ、蟻一匹通さない切込みハギ、最強と言われる縦直角の積木（さんぎ）積がある。熊本大地震でも熊本城の角の積木積は持ちこたえた。

先日、江戸城の石組を散歩がてら見に行ってきた。江戸城、皇居の石組みを見に来ている日本人はいない。濠の向こうに見える石組みを見ているのは外人観光客だけだった。世界に誇れる石組みであるが、あまり興味を示す日本人がいないのは淋しい。建物だけを見るのではなく、それを支える基礎にも美しい姿のあることをもっと知ってほしいものだ。

《風の呟き》

近代文学余話

打田昇三

明治維新の混乱から近代文学の芽を出させたのは明治十八年に日本初の国際的な小説「佳人の奇遇」を著した東海散士だと言われるが、皮肉にも彼は「賊軍」にされた旧・会津藩の武士で本名を柴四郎と言った。後に政治家（衆議議員・ジャーナリスト）としても活躍している。

其の数年後には二葉亭四迷が坪内逍遙の紹介で口語体リアリズム小説「浮雲」を発表したのだが二人ともに賊軍に近い幕府の親藩・尾張藩士の子

であつた。二葉亭四迷の本名は長谷川辰之助だが父親に「小説など書く奴はクダバツテシマエ！」と言われて、それをペンネームにしたらしい…。二人が出会つた日を「近代文学の日」とするよう主張した学者も居たと言う。その後になるが、四迷、逍遙に続く島崎藤村・森鷗外らの登場が日本近代文学の出発点に挙げられている。

屈辱的と言われる勝利ながら大日本帝国が日露戦争に勝つたことで国民の目が広く国内に向けられるようになり、義務教育制度の普及で「文盲」が減り文化が飛躍的に向上したのである。

森鷗外の「三田文学」、武者小路実篤・志賀直哉らの「白樺」、谷崎潤一郎・芥川龍之介・菊地寛らの「新思潮」など、新理想主義とか新現実主義の理念を掲げた文人たちが、それぞれの雑誌を舞台にして活躍する時代が到来したほか、既成の作家が拠る雑誌とは別に「大正デモクラシー運動」の影響で生まれた「プロレタリア文学」と呼ばれるものがあり「我等」「改造」「解放」などが次々に発刊された。明治中期からある「中央公論」は其の運動の拠点であつたらしい。

文学を自然科学と同じく外部からの目で描くと言う「自然主義文学」は、フランスから伝わり、明治から大正にかけて島崎藤村や田山花袋らによつて実践されたけれども、国家権力が強化された大日本帝国では、残念なことに世界の潮流に逆行して、本来の成果が得られないまま「私小説」と言う枠に閉じ込められ次第に衰退してしまうのであるが、その現象に反発して起こつた「新現実主義」に芥川龍之介、菊地寛、久米正雄、山本有三などが活躍して有名作家となつたことは、怪我の功名ながら日本文化の進歩に貢献したのである。そうした中で大正十五年に東大(帝大)独文科を

出て、新劇運動の拠点とされた築地小劇場に入り小山内馨、土方与志らの指導を受けた劇作家に札幌生まれの久保栄が居た。日本プロレタリア演劇同盟に加わり、左翼劇場で「火山灰地」「ファウスト」などを演出し名を挙げた左翼作家である。

此の人に弟が居て戦時中であるから北大を出て軍人となり終戦後に警察予備隊に入隊した。後に將軍に任官されて阿見町に在る武器学校長、土浦市に在る武器補給処長を歴任されたが、昭和二十八年頃は立川市に置かれた保安隊武器技術連隊の長であつた。当時の処長は通産省の官僚である。

其の頃、私は保安隊に入り三か月の基礎教育が終わつて後期の専門教育を受ける身であつたが、中隊長に呼ばれ「明日から連隊長に奉仕しろ!」と言われた。丁稚奉公に出されたのである。その時に物知りな先輩が居て「連隊長は久保栄の実弟だぞ!」と知らされたがどうなるものでもない。昭和二十九年一月に副処長でもある連隊長の専用ジープに同乗して立川から土浦に來た。それ以來三十年、「火山灰」のように沈澱して転勤を逃れ、無事に定年を迎えることが出来たのである。

熱帯へ移住の夢

菅原茂美

私はかつてJICAの国際協力事業として、中米のある国(北緯13度、標高5000m)で、熱帯とはいえ、実に快適な環境で生活した経験がある。物価は安く、それほど熱くもなく、日本の定年退職後、年金で楽々暮らせる。ある程度の文化水準は確保されている。しかし、治安と衛生は、日本と比べ物にならない酷さ。私は万全の防備でマリアア感染は防いだが、アメーバ赤痢で、死線をさまよつ

た。しかし現地の医者は、本病に慣れているらしく、一発で治してくれた。他にも熱帯病は無数にあるが、JICAの防御マニュアルを忠実に守れば、何とかなる。

さて治安であるが、居酒屋に入つたら壁に新しい弾痕がある。訳を聞いたら、この間、客同士が撃ち合いをしたばかりとの事。今でも西部劇さながら。銃はだれでも簡単に保持している。

話は変わるが、熱帯で人類が発祥したという理由がよく分かる。衣食住に殆ど心配は要らない。寒さを防ぐ為の衣類など、考える必要はない。ちよいと大事な所を隠せばそれでよい。食糧はとにかく自然界に満ちている。しかも中緯度地帯では考えられないような美味しいトロピカルフルーツが、多種多様。マンゴーやグレープフルーツが何気なくそこらに実っている。ヤシの果汁は、種類によつては真に美味しい。自然界の山川草木いづれも興味津津。特に野生蘭など熱帯の花々には強く心を惹かれる。そして住居も寒さを防ぐ為の特別配慮はいらない。但し大型のネコ科の猛獣が居る所は、かなり嚴重な警戒が必要。それに超悪性の伝染病を媒介する衛生害虫対策は、絶対に必要である。

中米の住民は、インディオとスペイン系白人との混血(メスティン)が殆どで、どちらの血液が濃いかにより、まるで違う。白人が占領当時、軍隊に女性はほとんどいなかったであろうから、結局原住民の女性を白人がめとる事例が多かつたであろう。白人主体のハーフも代を重ねると白人の血が濃くなる。すると足の長い皓齒明眸の超美人が多くなり、殆ど白人世界とあまり変わらない。居酒屋などで、殆どスペイン白人と変わらない美人が、わずかのチップで、フラメンコを長時間躍つてく

れる。日本人はお金を持つてしていると知つてのことか、60歳過ぎてゐるのに、誘惑は多い。しかし節度をもつてあたれば問題はない。ならばそこに永住するかと問われれば、簡単にイエスとは言い難い。理由は生活努力への緊迫感がない。人間は、何かに自己努力により、前途を展開しようとする現実性がなければ、日常がつまらない。

今月号に書いた地球脱出の件だが、例えその惑星の温度や水や空気が地球と同じであつたにせよ、それは安楽な現実からの逃避で、「人の道」を歩むべき道理に叶つていない。それまでの地球での暮らしが偽文明であつたがゆえに、地球での生活がゴミゴミしていると感ずるのであつて、その生活態度は、新世界に移つた後も同じ事を繰り返すに違いない。先進国が未開地を侵略し植民地化しても、結局弱い者いじめで、利己主義を貫く体質に変わりはないのと同じ。人間の本性は、かなり真剣に巻き直さなければ、高貴な神聖さに近づきはしないと思う。

【特別企画】

打田升三の私本・平家物語

巻第八 (二一・一)

冒頭から「征夷將軍」が出てくるので平家物語は本格的な戦時体制に入つたことが分かるけれども「敵(夷)」にされるのが現職天皇を連れた平家なのであるから「日本の国は世界に誇る万世一系の天皇を擁する国」であつたのかどうか考え直す必要が有るように思えてならない。

そもそも「將軍」と言うのは、後から日本列島

に入り込んで来た勢力が、先住民族を追いつし或いは封じ込める目的で派遣した集団の長が最初らしく、其の名称も「持節鎮狄將軍、鎮狄將軍、陸奥鎮東將軍、持節征東將軍、持節征夷大將軍」(じせつちんてきしようぐん、ちんてきしようぐん、むつちんとうしようぐん、じせつせいとうしようぐん、じせつせいとうしようぐんなどと呼ばれた。「持節」と言うのは天皇から合戦の委任状のような「節刀」を授けられることである。そして「征夷」の「夷」は「えびす」と読まれるのだが、本来の意味は「東方の君子国の人」らしい。其れから考えると、何処だかは知らないが後から此の国にやつて来た野蛮な民族が、日本列島の先住民族である筈の君子国を征服する名目で偉そうな名前を付けたのだと思わざるを得ない。

平家の全盛時代には偶(たま)に僧兵が暴れるぐらいで將軍を派遣する必要は無かつたと思われるが、其の平家が賊にされて今回の最初の章段では其れまで罪人として伊豆に流されていた源頼朝が一夜にして「征夷將軍」に任じられるのであるから権力の推移というのは予想もつかないが、次の巻第九で頼朝に潰される木曾義仲も後鳥羽天皇に要求して征夷大將軍にして貰つた。功績から言えば妥当であるけれども、自尊心の強い頼朝は其れが面白くなくて義仲を消したであらうか。

平清盛は武力を手に入れた後も京都に留まつて公家化してしまつたが源頼朝はそれを教訓にしたのかどうか京都には目もくれず、関東に拘つて鎌倉に幕府を開いた。協力してくれた東国の武士たちに配慮したのかも知れない。鎌倉は平家の祖先・貞盛の孫に当たる平直方が持つていた土地である。直方の娘が源頼義に嫁いで八幡太郎義家を生んだので鎌倉領が平氏から源氏に贈られたのである。

源氏と平家は最初から敵では無かつた。

巻第八では源頼朝、木曾義仲、そして平家の三勢力が昔を忘れて争う。歴史とは「生き延びた者の欲望を美化した記録」と言えないこともない。

今回、書く部分は少し長くなるが、本格的な源平合戦になる巻第九の前の木曾義仲による平家追い落としと京都占領、そして失敗、と権力の入替わりが激しい。武士であるからには誰でもナンバーワンが欲しいのであろうが、人間の欲望ほど手に入れる苦労が多くて壊れ易いものは無い。

征夷將軍院宣(せいいしようぐんいんせん)のこと

此の章段でいきなり鎌倉の源頼朝の名前が上がるので木曾義仲や平家の者達は面白く無いかも知れないが、後白河法皇にしてみれば平家が滅びた後に朝廷を護る武装集団として木曾義仲には任せたくないという思いから源頼朝に京都へ出て来るよう命じたのである。しかし二十年近い収容所生活で疑い深くなつてゐる頼朝は東国を離れようとなし。其の後の行動をみると、源氏ながら常陸国に住み着いてゐた佐竹の動向と、奥州藤原氏の存在が気になつてゐたようにも取れる。

仕方がないから後白河法皇は鎌倉へ使者を下して征夷將軍の院宣(法皇の出す命令、天皇が居ないので勅宣と同じになる)を達することにした。

原本に「左史生」とあるが多分、少納言の下に居る太政官の大史(正六位)中原泰定が使者に充てられた。此の人物は巻第四「還御」で大納言に命じられ高倉上皇に藤の花を献上した者である。

中原泰定は治承三年十月十四日に関東へ下り院宣を伝えたことになるのだが史実は頼朝が征夷大

將軍に任命されたのは九年後とされている。この時点では単に上洛を促しただけかも知れない。

平家物語の原文に従うと、頼朝は「法皇の命令を私邸で受け取ることは出来ない」と言つて鶴岡八幡宮で受け取ることにした。この神宮は地形が京都の石清水八幡宮にそっくりであり、廻廊を巡らし、楼門を備え、参道を十余町（千数百メートル）ほど見下すように造られている。

次に、どうでも良い相談なのだが院宣の受取方法を決めた。結局、桓武平氏ではあるが早くから頼朝に従っていた三浦介義澄（みうらのすけよし）相模の豪族が頼朝に代わつて受け取ることにした。その理由は、①坂東八か国に知られた名門武将・三浦平太郎為嗣の子孫であること、②父親が頼朝の為に命を捨てた勇士であつたからあの世から護つて貰える？…の二点で選ばれたらしい。（三浦氏の祖先は平国香の末弟・良茂）

一方、院宣を持つて来る使者の中原泰定は身内の家来二人と家臣十人とを連れて来た。院宣は書状入れの容器に収納して家来が首に掛けていた。三浦介義澄も身内の武士二人と家臣十人とで出迎えたが、二人は和田三郎宗実（三浦一族）と比企藤四郎能員（頼朝の乳母の養子）流罪中の頼朝に仕えていた）であり、従う十人も大名である。

義澄は濃い紺色の垂れを付けた黒い鎧を着用し強そうに作つた太刀に大黒と言う羽付きの矢を二十四本差して、幾重にも蔓を巻いた弓を脇に抱え兜を頭から外し、腰を屈めて院宣を受け取つた。使者の中原泰定が「院宣を受け取るのはどのようなお方か、名乗りなさい」と声を掛けたので三浦介義澄とは言わずに「三浦荒次郎義澄」と本名を名乗つて院宣を収納箱に納めた。

義澄は是を箱ごと持ち帰つて頼朝に渡した。箱

は暫くして待機していた中原泰定に返されたのが重いので開けて見ると、空箱の筈が金額で百両ほどの砂金で詰まつていた。余計なことだが源平盛衰記では百両では無く十両になっている。誰かがクスネた？のであらうか。

やがて鶴が岡八幡宮の拜殿で歓迎会が開かれ、中原泰定に酒が勧められた。此の時に平家物語にも源平盛衰記にも「斎院次官親義陪膳」と書いてあるが、言葉通りだと頼朝の代理で接待したことになる。此の人は現代で言えば都知事を勤めた藤原光能の子である。斎院次官は加茂神社に仕える皇女（天皇が変わるたびに替わつた）付き官庁の次官で、頼朝が流された伊豆などの国主と同じ位階を持つ。源頼朝の周辺には既に其の様な人物が集まつて居たことになる。

原本には次に「五位一人役送を勤む」とある。是は接待の料理を配膳係に届ける役であり其れを諸国の国司と同じ官位の者が担当した。源頼朝にしてみれば刑務所の囚人から將軍様になつたので使者に最大限のサービスをした。手土産として馬が三頭曳き出され、其の中の一頭には立派な鞍（くら）まで付けられていて、それを曳いていたのが後に富士の裾野で曾我兄弟に討たれる狩野工藤一藤祐経（かのくどういちろうすけつね）で原本には「大宮のさぶらい（武士）たりし狩野工藤一藤資経」と書いてある。大宮とは、後白河法皇に代わつて木曾義仲を謁見した藤原実家の妹で巻第一「二代后（にだいのきさき）」「山門御幸」に登場する近衛天皇の皇后・藤原多子のこと。絶世の美女と言われた此の皇后は、平家が都を福原に遷した時にも是に従わなかつた。工藤祐経は平重盛の計らいで此の皇后に仕えていたらしい。

補足しておく工藤祐経は南家藤原系で伊豆に

土着した豪族（狩野、工藤、伊東）の総領であり頼朝とは最初の妻が姉妹であつたから義兄弟に当たる。

叔父であり舅である伊東祐親（曾我兄弟の祖父）に領地を奪われ、妻（祐親の娘）を奪われそれを怒つた工藤の家臣が祐親を討とうとして、祐親の子（河津三郎祐重）を誤射してしまった。残された祐重の子が曾我兄弟である。

頼朝のほうも伊東祐親の娘（工藤祐経の妻の妹と思われる）の間に子供まで居たのだが平家を憚る祐親に子供を殺され、さらに命を狙われる。祐親の息子に助けられて北条に逃れた頼朝は、そこで政子と知り合うのである。

話を本題に戻して、源頼朝は茅葺屋根の大きな家を手入れして中原泰定の宿舎とした。寝所には綿を十分に入れた絹布団と、小袖（着衣）十組が長持（置き簞笥）に入っており、紺色・藍色の布や白布が山と積まれていた。宴席や食事の席に出される料理は豊富でどれも贅沢に飾られていた。

次の日、中原泰定は頼朝の館に向かった。二人が公式に会うのは其の日が初めてである。頼朝の館は内外に武士の詰所がありどちらも広かつた。外には家臣たちが並び、内部には源氏一門を始めとした武将たちが並んで待つており、使者の泰定は源氏の席の上座に据えられたが、少し経つて寢殿の間に案内された。其処には高麗縁（こうらいべり）と言う高価な輸入品の畳が敷いてあつた。

泰定が着座すると正面の御簾（みす）すだれが上げられて天皇のように源頼朝が現れた。頼朝は無紋の狩衣に立烏帽子と言う中途半端な礼装ながら、泰定が観察すると顔が大きく身長が低く、それでいて何となく優美な人物で言葉がはっきりしていた。形式的な挨拶が済むと頼朝は自分の言い分を一方的に、次のように言いだした。

「平家は此の頼朝の威勢に恐れて都を落ちたのに（…本当にそうか、どうか平家に聞いてみないと分からないけれども、頼朝はその様に言った其の後に木曾の冠者（義仲）と十郎藏人（行家）とが入り込んで来て、自分の手柄のように官位や褒美を望み、その上に与えられた国を嫌うなどは誠に奇怪である。更に奥州の藤原秀衡が陸奥守になり、佐竹四郎高義が常陸介になった（原本には「常陸守」とあるが、常陸は親王任国であるから常陸守にはなれない）征夷將軍の宣示も、さることながら此の二人は頼朝の命令に従わないので、この者たちを追討する旨の院宣を給わりたい」

是を聞いた中原泰定は内容が途方もなく大きいことなので慌てて言った。「本来ならば私も頼朝殿に名簿を提出（服従する意思を表明）しなければならなところですが、此の度は征夷將軍に任じられた宣旨をお伝えする使者として参りました。追討の宣示は一先ず都に戻り、改めてお知らせに参るということでお許しを頂きたく存じます。私の上司も、その様に申しております」

頼朝は笑って「今の頼朝の立場で政府高官（京都の公家）から名簿を提出して頂くことなどは考えても居りません。しかし、その様に言われるならば、私も其のつもりで居ましょう」と言った。「しまった！」と思つた泰定は一層、頼朝が恐ろしくなり、直ぐにでも鎌倉を出ようとしたのだが頼朝は許さず「今日のところはゆつくりして」と止めた。眠れないような一夜を明かした泰定は翌日、頼朝の館に別れの挨拶に行った。

頼朝は、その場でも使者（泰定）への贈り物として浅緑の糸で編んだ鎧（腹巻部分）と、銀の飾りを付けた太刀、弓一張りに狩り用の矢を付けて揃え、さらに十三頭の馬を引き出した。其のうちの三頭には立派な鞍が置かれていた。泰定の家臣たち十

二人にも鎧、小袖、上着、鞍などが与えられたほか、荷が積んである三十頭の馬がつけられ、鎌倉を出た次の宿場から京都に向かう街道の鏡の宿（滋賀県中部）に至るまでの宿場ごとに（使者一行の接待用として）十石ずつの米が（鎌倉から）配られた。宿場では（配られた米の量が）余りにも多かったので、是を施しに使った。

猫間（ねこま）のこと

前の章段で、鎌倉の源頼朝が法皇の使者を接待と贈り物で骨抜きにしたのとは反対に、此の章段では京都に居た木曾義仲が公家などに対して無礼な振る舞いをする。考えて見れば田舎育ちで合戦以外は知らない木曾義仲が無駄な権威をひけらかす、公家たちを法則どおりに扱える筈がない。木曾義仲は化け物のような当時の朝廷や公家などに構わずに京都以外の場所に本拠を置いて武力を背景に暗黙の圧力を掛けて置けば良かったのかも知れないが、平家を追い落とした後釜に座り込んだ。その結果、気の毒だが朝廷から公家社会から、本来は身内である筈の頼朝まで敵に回してしまう。

表題の「猫間」とは、木曾義仲を訪問した公家の俗称であるが、それを知らない義仲の言わば傍若無人な態度が批判的に書かれている。

後白河法皇の使者として鎌倉に行った中原泰定が戻ってきて後白河法皇の許に参上し法皇殿の中庭で細部に亘る報告をした。何しろお土産も十分に貰っていたので自分が見聞したことを良い様に申し上げたから法皇も満足され、周りに居た公家たちも納得してうなずいた。源頼朝の評価は高まったのだが、そうなると同じ源氏でも近くに居座る木曾義仲のガサツぶりが目立つことになる。

左馬頭（さまのかみ）従五位上、大國の国司と同じ位階に任じられて都の守護を担当させられたのであるが、其の立ち居振る舞いが無骨で言葉遣いが乱暴なことは呆れるばかりであった。それも道理で（義仲は）二歳から信濃国木曾の山中で過ごし三十歳まで居たのであるから都の風習や礼義作法には全く縁が無かった。普通の武士ならばそれでも済むが、位階を持つとそうはいかない。

或る時に、猫間中納言光高という公家が木曾義仲を訪ねて来た。家臣が「猫間殿が御出でになりました。何かお話があるとのことですよ」と取り次ぐと、義仲は笑いだして「猫が人に会いに来るのか？」と言った。家臣が「是は猫間の中納言と呼ばれるお方です。猫間は宿所の名称でしょう」と教えたので義仲は「それならば…」と対面した。初対面であるから変つた名前に疑問を持つのは当然であり義仲の態度を非難できないがその後が良くなかった。相手を「猫殿」と呼んだのである。

其の時に義仲は食事をしていた。考えようではサーブス精神で言つたと思うのだが「猫殿が御出でになったのであるから食事の用意をせよ」と部下に命じた。中納言は慌てて「今時に食事など、とんでもない！」と断つた。当時の公家は武士と違つて昼食の習慣が無かつたと言う。武士は合戦が年頭にあるから昼食を摂つたのであろうか。

義仲は相手構わずに強引に食事を勧めた。信濃の山中で育つたので塩漬けでは無い食物を「無塩（ぶせん）」と呼ぶ習慣を其の俚に「此処に無塩の平茸（ひらたけしめじ）の一種がある。是を食べられよ…」などと言つてせかした。佐久の武士で義仲に仕えていた根井小野太（ねいのこやた）が中納言に付いて膳を並べ、田舎風の大きな食器に飯を山盛にし三種の副食品を付け平茸が入った味噌汁を添えて

勧めたのである。それらは義仲が食べていたものと全く同じである。

猫間中納言は戦場に駆り出されたような覚悟で出された食事に臨んだのであるが、食器類が古くて薄汚れているように見えたので完全に食欲を失ってしまった。義仲は恩に着せるように「その食器は義仲が仏事など特別な場合に使う物である」と言った。中納言は一口でも食べなければ此の場を逃れられないと思ひ箸を取って食べる真似をした。それを見た義仲は「猫殿は小食のようで、評判の『猫おろし』（猫が食べ物を残すこと）を為さった：遠慮せずに食べられよ！」とせめ立てた。中納言は恐ろしくなって使者の用件も言わず其の場を逃げるようにして帰ってしまった。

都慣れしない木曾義仲の失敗談は続く。政略的な人事かも知れないが左馬頭に任命された義仲は宮中に参内する際に武士の常装である直垂（したたれ）姿ではいけないであろうと、礼服とされる布衣（狩衣）を取り寄せて着た。しかし着慣れないので烏帽子の被り方から着付けまで何ともギョチなく見えた。其の姿で牛車に乗ったのだが武装して馬上にある姿とは似ても似つかぬブザマな格好になってしまった。利用した牛車は西海に逃れて行った平家の頭領（屋島の宗盛）の物である。

運転手に当たる牛飼も平家に仕えていた者が捕らわれてから源氏に再雇用されたので牛と同じで内心では面白く無い。牛も平家に飼われていて暫くは活躍する場面が無かったから運動不足でストレスが溜まりムシヤクシヤしている。門を出るときに牛飼が一鞭当てたから、待ちくたびれていた牛が「全力疾走」の命令と受け取って自棄（やけ）半分で飛び出した。

慣れない牛車に乗った義仲は不自然な態勢のま

まで仰向けに倒された。慌てて起きようとしたけれども身体が言うことを聞かない。「止めろ！」と言うつもりで牛飼いに「やれ、こ牛こでい！」と繰り返して叫んだのだが、方言なので牛飼は「もつと急げ！」と言われたと勘違いして七、八百メートルを全速力で走らせた。

此の状態に気付いた重臣の今井四郎兼平が騎馬で追いつき「なぜ乱暴な扱いをするのか！」と叱りつけた。牛飼は「牛の勢いが凄くて（鼻息が荒くて）とても制御出来ませんでした」と言い訳をしてから、義仲が牛車に乗ったことが無いのだと知り「牛車に手を掛ける持ち手が付いています」と教えた。義仲は妙なところで感心して「是は便利だ。付けたのは牛飼の知恵か。前の主人平宗盛の命令か？」と言った。

牛車が後白河法皇の御所に着いて牛飼が車両部分から牛を外し、下車する時に義仲が後部から降りようとしたので、京都出身の下僕が「車には後部から乗り、降りられる時は前からです」と申し上げたけれども、義仲は「車だからと言って無駄な動きは出来ない」と後ろから降りてしまった。

其の他「おかしきこと（滑稽なこと）」が多かったけれども、怒られることを恐れて誰も黙っていたと原本にある。突然に武力のトップに出た木曾義仲は傲慢と世間知らずの故に平家以外に多くの敵をつくり、遂に身を滅ぼすことになる。

（続く）

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659